

戦時下の太陽黒点観測～田中幸明氏の功績～

○米谷 夏樹¹ 櫻井 隆² (1.国立天文台太陽観測科学プロジェクト 2.国立天文台)

東京大学東京天文台太陽物理部は1938年から黒点スケッチ観測を継続している。第二次世界大戦が激化し東京多摩地区も空襲を受ける回数が増えたことや、1945年2月8日に三鷹本館で火災が起きたことなどから、中央气象台柿岡地磁気観測所に職員が疎開して観測していた時期があることが知られている。東京大学百年史にも「黒点観測は茨城県柿岡地磁気観測所内で行われた」と記載がある。疎開先が柿岡に選ばれた理由を明記した資料は未発見だが、柿岡にも三鷹と同型のカールツァイス製口径20cm屈折赤道儀があり、独自に黒点観測やプロミネンス観測を行っており、すみやかに観測を再開できる環境が整っていたことが大きな理由だと思われる。しかしながら、天文台の誰が、いつの期間、どのような手法で観測していたかなど具体的な事実が不明だった。

今回の調査で、技官の田中幸明氏が1945年6月頃から1947年3月頃まで疎開していたことが判明した。田中氏は1944年から1980年まで観測担当者として三鷹で勤務した職員で、聴覚に障害を持っているため対話は主に筆談で行われていた。調査した記録用紙には緻密な黒点スケッチが描かれているだけでなく、气象台職員との日々のやりとりが文字で残っており、当時を様子を知らることができる貴重な資料である。疎開の実態や田中氏の人物像、功績の一部を紹介する。